

先進校に学ぶキャリア教育の実践

豊富な"人との出会いと経験"で改革を加速 多国籍化する学校の挑戦

— 東京・都立 田柄高校 —

外国籍の生徒を積極的に受け入れ、教室に多様な言語が飛び交う田柄高校は、
これからの日本社会の縮図といえるかもしれません。
そんな同校で行われているキャリア教育とは、どのようなものでしょうか。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍 総合的な学習の時間 🔍 奉仕 🔍 人間としての在り方生き方に関する新教科
🔍 外部人材活用 🔍 コミュニケーション 🔍 プレゼンテーション

特別指導の多かった学校が オープンで活動的な学校に

現在の東京都立田柄高校をみれば、多くの人は「オープンで活動的な学校」と感じるだろう。しかし、数年前まで同校は、地域から「実態がよくみえない」「生徒指導の多い学校」と思われていたという。何が短期間で大きく同校の印象を変えたのか。その理由について、日本初の専任キャリア・カウンセラーとしての経験をもつ（※）同校校長の大池公紀先生は、「生活指導とキャリア教育を軸に段階的に学校改革を行ってきた結果」と語る。

学校改革の第1段階は、2012年からの生活指導のでこ入れだ。教員の組織化や服装指導の徹底などにより、謹慎指導が前年の3分の1に減少。成果の表れは「意思をもつて取り組めば学校は変わる」という教員の自信につながった。

生活面が落ち着くのと重なるように、入学生徒の顔ぶれにも変化が生じた。同校には普通科と、グローバル教育に力を入れる外国文化コースがある。都心部に近い立地もあり、同コースを中心に本人や保護者が海外出身というルーツをもつ生徒が数多く入学するようになったのだ。現在は全体の約3割が海外ルーツの生徒で、教室では中国語やハンダ語、タガログ語などさまざまな言語が飛び交っている。

「中学時代は学校に1人2人しかいなかった外国籍の生徒も、本校では特別視さ

れることはありません。萎縮せず自分を出せることで、自分も周囲も、その良さに気付くことができます。また、彼らには、校内の雰囲気オープンで陽気なものに変える力もありました。この環境を生かし、互いを尊重できる広い国際感覚を持つ生徒を育てていきたいと考えています」（大池校長）

外部人材を活用した キャリア教育で学校改革

生活指導がひと段落した13年度からは、学校改革の第2段階としてキャリア教育の充実を舵をきる。初年度はまず1年生の総合的な学習の時間をキャリア教育の視点で見直し、学年進行でプログラム設計が進められている。進路指導主任の石井裕己先生はこう話す。

「将来に意欲的な生徒が増えてきた今、出口指導だけでは期待に応えられません。将来を見通し、コミュニケーション能力や自ら考えて行動・発信できる力を育てることが必要でしょう」

今年度は、1、2学年の総合的な学習の時間（2学年は東京都設定教科・科目「奉仕」として実施）に「キャリアデザインⅠ・Ⅱ」のプログラムを実施（図1・2）。3学年の総合的な学習の時間は進路実現に向けた活動が中心だが、来年度は「キャリアデザインⅠ・Ⅱ」の延長として再構築する予定だ。

これらのプログラムでは、生徒が受け



School Data

普通科 / 1980年開設
 生徒数 540人(男子227人・女子313人)
 進路状況(2013年度実績) 大学35.0%・短大7.4%
 専門学校等28.2%・就職11.7%・その他17.8%
 東京都練馬区光が丘2-3-1
 TEL 03-3977-2555
 URL <http://www.tagara-h.metro.tokyo.jp/>

Outline

2008年、従来の3コース制から、2コースを廃止し、普通科3クラス、外国文化コース2クラスの体制。近年は生活指導をはじめとする学校改革を進め、キャリア教育を活用した自己有用感の育成、授業規律改善、教員の授業力向上に力を入れてきた。英語科専門科目「異文化理解」をはじめ体験的な活動から外国文化を学ぶ外国文化コースを軸に、留学生や海外高校生との交流に力を入れ、国際人の育成を目指している。

図1 総合的な学習の時間の年間計画より(2014年度)

	1年生	2年生	3年生
4月	ガイダンス	ガイダンス・グループ選択説明	ガイダンス
	チームコンセンサスワークショップ	作家杉山明氏講演会	プレゼン講座(担当教師の説明)
	金融の話(SMBC社員による)、または教師による私の進路	グループ決定など	プレゼン講座(担当教師の説明)
5月	金融の話(SMBC社員による)、または教師による私の進路	グループ別活動①	プレゼン講座(外部講師の説明)
	進路学習(進路の手引きより)	グループ別活動②	作業1
	大学生に聞く「大学の勉強」講座の準備	グループ別活動③	作業2
6月	「トキョー学生図鑑」のオープンキャンパス	グループ別活動④	作業3
	「フリーター」についての講演会	グループ別活動⑤	作業4
	人間としての在り方生き方①	グループ別活動⑥	3年進路ガイダンス
9月	人間としての在り方生き方②	グループ別活動振り返り・プレゼン準備	プレゼン講座(外部講師、チームコンセンサス)
	人間としての在り方生き方③	クラスプレゼン	
	からだで感じる「コミュニケーションワークショップ」	3年次選択説明会	グループ作業1
10月	からだで感じる「コミュニケーションワークショップ」	光が丘公園整備・清掃活動	グループ作業2
	からだで感じる「コミュニケーションワークショップ」	チャリティータンタ代表講演会	グループ作業3
	からだで感じる「コミュニケーションワークショップ」		グループ作業4
11月	からだで感じる「コミュニケーションワークショップ」		
	ワークショップ「青年海外協力隊Lifeストーリー」		グループ作業5
	3年の発表を聞く	フォトジャーナリスト安田菜津紀氏講演会	1年教室で発表(外部講師)
12月	人間としての在り方生き方④	元ソフトバンク全国営業ナンバーワン社員による講演会	まとめ(外部講師)
	適性を知る「右脳・左脳ワークショップ」	子ども支援団体NPOキッズドア	まとめ
	「職業人授業」と「自己理解ワークショップ」	NPOキッズドア／先輩講話	まとめ
1月	人間としての在り方生き方⑤	NPOキッズドア	
	まとめと振り返り(キャリアデザインの振り返り)	1年の振り返り	

*水曜5-6限(総合的な学習の時間およびLHR)に実施している内容から、キャリア教育、奉仕に関する項目を抜粋

図2 東京都独自の取り組み

■東京都必修科目「奉仕」

奉仕に関する基礎的な知識の取得や社会貢献を適切に行う能力・態度を育てるため、2007年から都立高校で奉仕体験活動を行う教科「奉仕」を必修化した。高校在学中1単位以上とし、総合的な学習の時間で代替可。
 現在、この「奉仕」を発展させるかたちで、道德教育およびキャリア教育の中核的な教育活動となる「人間としての在り方生き方」に関する新教科を全都立高校で実施することを目指し、研究・試行が進められている。

■地域教育推進ネットワーク東京都協議会

東京都教育委員会は「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」を2005年に設立。小・中・高校の教育活動に、企業、大学、NPO等の専門的な教育力を効果的に導入するためのネットワークづくりに取り組んでいる。13年12月時点で80件近い企業・大学・NPO等が参加し、資料や教育支援プログラムを提供している。都立高校では教科「奉仕」やキャリア教育等の授業などで活用されている。

身でなく活動の中心となることで重視されている。そのためのカギとなつているのは「外部人材の活用」だ。今年度、「キャリアデザインI」にかかわる外部団体・施設・個人は7団体、約60人、同IIにかかわるのは10団体、約110人。東京都教育委員会による企業・大学・NPO等と連携する「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」(図2)や、担当教員の個人的なつながりが活用されている。

「本校の生徒はフレキシブルで受容力があり、オープンで明るい。外部の方たちとつながることで、学校教育の限界を超え、もつと生徒の良さを伸ばす環境を作り出せると考えます」(大池校長)
 また、時間割上の特徴は、全学年が水曜日の5限を総合的な学習の時間、6限をLHRとしている点だ。内容によって2時間続きで使え、外部講師の来校の回数をおさえるなどの効率化につながっている。

これらのプログラム全体を統括しているのは進路指導部だ。しかし、学年団の方針を尊重して臨機応変に対応しており、今年度は1、3学年は進路指導部、2学年は学年団が中心となって推進している。

また、授業はチームティーチングで行われるが、活動時間をそろえることで教員の時間確保もしやすい。水曜日の午後は、ほとんどの教員が各教室に分散して授業に当たっている。



■2学年【グループ3：古着回収】
都のプログラムを活用し、UNHCR、ユニクロと連携。途上国の難民や貧困の現状を学び、校内のほか近隣の小学校にも呼びかけて古着を回収。計2234枚を回収、配送。



■2学年【グループ2：小学校低学年との交流】
昨年度までの活動をもとに、近隣の小学校を訪問。折り紙や絵本、宿題の手伝い等で交流。期間外にも学校行事（BBQ、お祭り）を手伝う。



■2学年【グループ1：高齢者との交流】
昨年度までの活動を継続し、近隣の特別養護老人ホームを訪問。ゲームや会話を楽しんだり、シーツ交換や車いすの清掃などを体験。



■1学年【からだで感じるコミュニケーション】
都のプログラムを活用し、NPOドラマケーション普及センターと連携。ゲームや劇を通して、自己表現やコミュニケーションの取り方を学ぶ。



■2学年【グループ7：高校生記者】
大学生ボランティアと連携。雑誌編集者や大学院教授など自分たちの興味関心のある社会人を選んで取材依頼。インタビューし、記事をまとめてプレゼンテーションで報告。



■2学年【グループ6：ミュージカル発表】
同校が独自に開拓したNPOコモンビートと連携。「自分たちでつくろう！ハイスクールMUSICAL」のテーマのもと、歌、踊り、チームワークを学びステージを考案、発表。



■2学年【グループ5：ビジネスプラン作成】
都のプログラムを活用し、NPOプラストビートと連携。「2020年オリンピック開催にあたり、外国人観光客が喜んでくれるビジネスを生み出せ！」のテーマにチームで取り組んだ。



■2学年【グループ4：古本等回収】
同校が独自に開拓したNGOルームトゥワードジャパンと連携。途上国の現状を学び、近隣の小学校で回収した古本、CD、DVDをもとに総額2万2873円を寄付。

東京都独自の新科目を 踏まえた新しい実践も

具体的なプログラム内容をみてみよう。1学年「キャリアデザインI」では、演技等を通じて自己表現やコミュニケーションを学ぶ「からだで感じるコミュニケーションワークショップ」（協力：ドラマケーション普及センター）、元青年海外協力隊が自身のキャリアや途上国での活動などを語る「Lifeストーリー」（青年海外協力協会）、自分の好みや特性について考える「右脳・左脳ワークショップ」（NPO法人16歳の仕事塾）などを実施。

外部講師の協力によるものが多い。また今年度は、東京都で検討されている「人間としての在り方生き方」に関する新教科の試行的実践も盛り込まれた（図2）。この新教科は都立高校全体で16年度から本格実施をめざすもの。今年度は約20校で試行的に行われており、同校もそのうちの1校だ。

授業で使うテキストも制作されており、「自己のよさを見出し選択し決断して自己のよさを生かす」「他者を正しく理解し充実した高校生活を送る」など20單元からなる。同校ではそのなかから4單元をピックアップし、5回の授業の題材としている。授業で生徒に配布する資料や指導案はテキストにあるが、同校生徒向けに慎重にカスタマイズしている。

「例えば、部活を休みがちな生徒のエピソードを題材とする際、『部活が活発とは

いえない本校の生徒がどう反応するか』『どう話せば身近な例として感じられるか』など、本校の生徒に響くよう、担当者が5時間程度の議論を重ねたうえで実施しています」（石井裕己先生）

生徒一人ひとりの個性に 合わせたグループ編成

2学年の「キャリアデザインII」は、1学年よりさらに深く外部人材がかかわり、生徒主体の活動を増やしている。その目玉となるのは、1学期を中心に行うグループ別活動だ。

外部の団体・施設と連携し、高齢者との交流、小学校低学年との交流、古着回収、古本等回収、ビジネスプラン作成、ミュージカル発表、高校生記者の7テーマを設定。教科「奉仕」の役割も担うため、高齢者との交流や古着・古本の回収で社会貢献に関するテーマが目立つ。

連携先は、7テーマのうち2つは従来の総合的な学習の時間での関係を引き継ぎ、2つは都のネットワークを利用。残り3つは、2学年総合的な学習の時間担当の石井誠啓先生が独自に開拓した。

「例えば、古本回収で連携したルームトゥワードジャパンさんは、数年前、マイクロソフトを辞して途上国の子どもたちに教育機会を届ける活動を始めた創設者の著書を読んで知った団体。事務局に依頼すると、高校からの声掛けは初めてだったのですが、こちらの思いに共感いただ

図3 「キャリアデザインII」の振り返りシートおよび
クラスプレゼン準備のワークシート



き、実現しました」（石井誠啓先生）

事前準備で「肝」となったのは、生徒のグループ編成だ。生徒の希望に基づいて人数調整するなかで、石井誠啓先生は各担任と話し合い、男女比や友人関係、相性を踏まえて効果的な生徒の組み合わせを検討。「友達同士で固まらずに人間関係が広がるようにここは分けよう」「あえてこの2人は一緒にしたほうが自分らしくできそう」「このメンバーならこの生徒がリーダーシップを発揮できる」など、生徒一人ひとりのことを考えてグループを作った。

「将来的にはそのような仕掛けをしなくてもよくなるのが理想ですが、現段階では、このグループ編成だからこそ成果が出たと感じています」（石井誠啓先生）



2学年総合的な
学習の時間担当
石井誠啓先生



進路指導主任
石井裕己先生



校長
大池公紀先生

「面倒くさい」が「もっとやりたい」に変化

グループ別活動は総合的な学習の時間とLHRの2時間続きで、全6回実施された。各グループに担当教員が1〜2人がつくが、あくまで見守り役。外部講師のリードのもと、生徒主体で進められる。最初はあまり盛り上がりがないグループもあったが、回を重ねるうちに雰囲気が変わっていった。

変化が最も大きかったのは、ミュージカル発表のグループだという。連携先は、表現活動によって自分らしくたくましく生きる個人を増やすことをミッションとする、NPOコマニート。参加生徒が意見を出し合ってミュージカルを作り、最終的にステージで自ら発表した。

「最初、参加生徒は『恥ずかしい』『面倒くさい』と文句ばかり。それが参加するうちにどんどんイキキとしてきたんです。教員とは違うアプローチによるコマニートのあの乗せ方が絶妙だったし、歌と踊りが得意な外国ルーツの生徒に巻き込まれた面もあるのでは。最後は『新しい自分になった』『1つになるすばらしさを学んだ』『これからはもっと仲間のことを考えて行動したい』などの感想を聞くことができました(石井誠啓先生)」

生徒主体の活動のなかでは、当然失敗もある。例えば、高校生記者グループでは、緊張しながら著名人に電話で取材依頼して、何度も断られた。また、数人の

チームでアイデアを競うビジネスプラン作成グループでは、メンバーをうまくまとめられないチームもあった。「そこから学ぶことがあり自信もついたはず。自分の頭で考えて行動できたという意味で大成功」と石井誠啓先生はいう。

毎回の活動後は振り返りシートを記入し、自分の体験や感想を記録。最後は各自のクラスに戻ってプレゼンテーションを行い、それぞれの経験をクラスメイトとシェアした(図3)。

初めてのプログラム実践で、いくつかの課題も明らかになっている。やる気のあがる生徒は多いが、最後まで火がつかない生徒もあり、モチベーションに差があると多くの教員が感じた。来年度は事前指導のオリエンテーションで、チームでやるという意識付けやアイスブレイクにいくつか配慮する予定だ。

生徒が変わる手応えが授業改革を後押し

このような外部の力を借りたプログラムを通じて、コミュニケーションやプレゼンテーションなどさまざまな場面で、「生徒が確実に変わった」という。また、人間としての在り方生き方に関する新教科や教科「奉仕」の要素も取り入れるなか、古着や古本を集めるなど実際に動いて「役に立つことができた」と感じる体験は、大切さを言葉で伝えるよりも効果があるとの手ごたえを感じている。

Interview

「個性的な大人の話で視野が広がった」(高田さん)



2学年 高田愛さん(写真右)
ケニング・ジュリア・美星さん(同左)

音楽が好きなので、『キャリアデザインⅡ』のグループ別活動では、ミュージカル発表に参加しました。ほかのクラスの人たちが多くて最初はちょっと緊張しましたが、一緒に踊りや構成を考え、最後の発表ではお互いを励まし合いながら1つになれて、すごく楽しかったです。また、指導して下さったNPOコマニートの大人の方と、空き時間にいろんな話ができただけでも興味深かったですね。個性的な方ばかりで、『こういう生き方もあるんだ』と思いました。実は私、この学校がどういところか、よく知らずに入学したんです。なので、入学後、周りからいろんな国の言葉が聞こえてきて、『こ日本?』とびっくりしました。私は将来、観光の仕事に就いて、世界を旅するのが夢。いろんな国の友達ができ、おもしろい大人との出会いがある、この学校を選んでよかったと思っています。

「社会で成果を出す難しさ・厳しさを痛感」(ケニングさん)

私が『キャリアデザインⅡ』で取り組んだのは、ビジネスプラン作成です。最初、プログラムに沿って空欄を埋めていくように作っていきんだと思っていたら、『ゼロから自分でビジネスアイデアを考えて』と言われて、『えっ!』(笑)。ちょうど部活動などが忙しい時期で、夜中に泣きながら準備したこともあり。最終日の発表では、外部の方から『数字の根拠は?』など厳しい指摘もたくさんいただき…。何も返せず悔しい気持ちもあったけれど、おかげで社会の厳しさやチームワークの大切さが分かりました。私は高校卒業後、母国アメリカの大学に進学して、心理学を学ぶのが目標です。学校でJICAの方や青年海外協力隊の方の話や聞き、海外支援での心理学の使われ方を知りました。考えるチャンスがいっぱいある学校だと思います。

「生徒には、『この人みたいになりたい』『こんな大人がいるんだ』たら将来夢を持って頑張ろう」と前向きになれる素敵な大人たちとの出会いや、どんどん新しいことを経験できる楽しさを知ってほしい。そして、高校を卒業したら、次は自分たちで新しい出会いや経験をつかみにいってほしいですね(石井誠啓先生)」。総合的な学習の時間のプログラムが、他の授業に与えた影響も大きい。「外部講師がディレクターとして生徒を動かすこともひとつの授業形態だと経験的に分かった」と石井裕己先生。外部人材のかかわりの効果を実感し、授業をも変えていこうとの機運がアップ。協同的な授業

方法について学ぶ校内研修も行われた。今後の課題は、キャリア教育で向上した力や意欲を、どう進路実現につなげていくか。外国籍の生徒は就職や奨学金受給の際の難しさもあり、同校独自のノウハウの蓄積が求められる。現在も進行中の学校改革の今後について、大池校長はこう語る。「学校が変わり始め、多くの生徒にモデルとなる進路実現の例も出てきています。その情報を学校全体で共有して生徒に自信を持たせるとともに、授業力により生徒の力をしっかりとつけていく。キャリア教育と併せて、進路実現につなげていきたいと考えています(大池校長)」